

# 松本地方の御柱祭

## 一木遣りとその詞章にみる地域性一

太田（細野）真理

### 1. はじめに諏訪大社の御柱祭と「1年遅れ」の御柱祭

諏訪大社は、信濃国一之宮とされ、長野県の諏訪湖周辺に上社（本宮：諏訪市、前宮：茅野市）、下社（春宮：下諏訪町、秋宮：下諏訪町）合わせて4箇所<sup>1</sup>に境内地を持つ。この諏訪大社の式年神事に「式年造宮御柱大祭」がある。通称「御柱祭」である。（本稿では、以下通称の「御柱祭」と記す）<sup>1</sup>。7年に一度（数え年で7年め、実際には6年に一度）寅と申の年の春に行なわれる祭で、山から伐り出した樫の大木（御柱）を、里の社まで氏子が力を合わせて曳いて行く。山の斜面を御柱もろとも滑り降りる「木落し」（上社、下社）（写真1）や、雪解け水が流れる宮川を渡る「川越し」（上社）、人が乗ったまま柱を建てる「建て御柱」などの勇壮な場面が有名で、「天下の奇祭」と称される由縁であるが、それは祭の一部である。境内の宝殿を新築し、宝物を移す「宝殿遷座祭」（写真2）も含め、御柱祭という。



写真1 諏訪大社下社山出し 木落し



写真2 諏訪大社上社 宝殿遷座祭

なぜ御柱を建てるのかについては長い間議論が行なわれてきた。なかでも有力なのは、社殿造営代替説（定期的に社殿を新造する替わりに柱のみ建替える）とされる。しかしながら、未だ定説と言えるものは無い<sup>2</sup>。

大社の御柱祭に倣い諏訪地方では、「小宮」と称する、各地区の鎮守、氏神、産土神などでも、主に同年夏～秋に御柱祭を行う。また、飯田、伊那、上田、長野など信州の各地域の諏訪系神社でも同年内に御柱祭が行われている。

ところが、同じ信州でも、塩尻から松本にかけての地域では、翌年（卯、酉の年）に御柱祭

が行われる。この地域の御柱祭は、斎行時期だけでなく、木作りをはじめとした祭の作法、木遣りの所作や詞章に諏訪とは異なる点が多くみられる。筆者は、平成 23（2011）年に松本市の須々岐水神社の御柱祭を調査し、木作りや木遣りの作法が諏訪とは異なる様式を持つことを報告した<sup>3</sup>。それをふまえ平成 29（2017）年には、調査対象を、1 年遅れで御柱祭を行う、塩尻を含めた松本地方の 8 神社へと広げた。斎行時期を同じくする神社群は、何か地域的な特色を持つ可能性があると考えたからである。その結果として、須々岐水神社だけでなく、松本地方の御柱祭には、祭の根幹となる木作りを中心とした様式に地域的な特色があることを確認することができた<sup>4</sup>。

本稿では、祭の様式から視点を転じ、祭の開始から終了まで様々な場面で耳にする木遣り唄に着目して、諏訪とは異なるその地域性について考察してみたい。

## 2. 御柱祭の概要と木作りの類型

木遣りについて述べる前に、平成 29 年の御柱祭調査において明らかになった、木作りを中心とした地域的特色とその類型について概観しておく<sup>5</sup>。調査の対象としたのは、次の 9 神社である（図 1）。

○小野神社・矢彦神社〈信濃国二之宮〉（塩尻市北小野、上伊那郡辰野町小野、両地区の境に神域を隣接して祀る。）

いさごだ  
○沙田神社〈信濃国三之宮〉（松本市島立）<sup>6</sup>

ちかとう  
○千鹿頭神社（松本市神田、里山辺林、両地区の境（千鹿頭山の尾根）に社殿を隣接して祀る。）

○松本市薄川流域の 4 神社

すすきがわ さとやまべ いりやまべ おおわごう  
須々岐水神社（里山辺薄町）、橋倉諏訪神社（入山辺橋倉）、宮原神社（入山辺宮原）、大和合神社（入山辺大和合）

とくに松本市里山辺と入山辺の 4 神社は、美ヶ原高原を水源として西流する薄川が刻んだ谷に沿って点在している。これを地元の地名呼称を用い「山辺谷」の神社と総称する。

御柱祭は、当年だけでなく前年或いは前々年から大小様々な行事があり、綿密に準備される。それぞれの行事の名称は各神社によって相違があるが、大きな流れは共通しており、次の 8 段階にまとめられるといつてよい<sup>7</sup>。

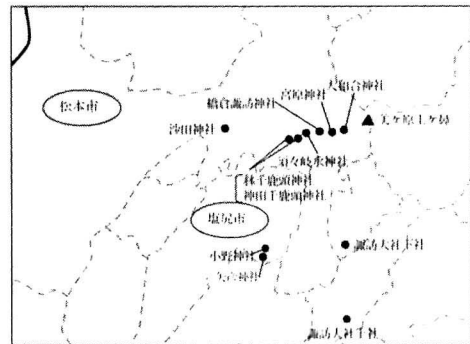


図 1 諏訪大社と松本地方の御柱斎行神社

- ①仮見立て：御柱となる候補木を予め見定める。
- ②本見立て：御柱となる木を決定する。
- ③伐採：御柱となる木を伐り出す。
- ④木作り：伐採した木を御柱として相応しい形に整える。
- ⑤綱縋り：山出し、里曳きに用いる曳き綱を縋って作る。
- ⑥山出し：御柱を山から里へ曳き出す。
- ⑦里曳き：御柱を曳行し神社へ運ぶ。
- ⑧建て御柱：御柱を境内に建てる。

この中でとくに注目されるのは、③伐採と④木作りの方法である。小野、矢彦、神田千鹿頭では、諏訪と同様に切り株を残して地面に水平に伐り倒す。一般的な伐採方法である。本稿ではこれを「水平伐採」と呼ぶことにする。これに対し、山辺谷の神社および林千鹿頭では伐採に先立って「根堀り」という作業をする。この作業は、地面を掘り下げて木の根をすっきり露出させ、伐採しやすいように主根を切り、伐採まで木が立ち続けていられるだけの側根を残す。主根を切った木の根の下には、大人が入り込めるほどの空間ができる（写真3）。すなわち伐採は、幹ではなく根を伐ることになる。これに携わる者の、木に関する知識と技術が欠かせない行事である。この作業は手作業で、氏子が総出で丸一日かかる。氏子たちが、一連の行事の中で最も地味で大変な力仕事だというほどである。



写真3 根堀り 須々岐水神社一の御柱



写真4 木作り「男作り」

『古事記』天の岩屋の条には「…天の香山かぐやまの五百津真賢木いほつまさかきを、根こじにこじて、上つ枝に八尺やさかの勾まがたま聰いほつの五百津の御すまるの玉を取り著け…」という記述があり、木を根ごと掘り出して祀ることが神事の古形としてあったことが推定される。上代文献と現代の神事をそのまま結びつけることには問題はあるだろうが、木を根から掘り出し木の生命力をそのまま運び出すことに重要な意義があったと読み取るべきであろう。また、根堀りをした木を「木作り」し、御柱の形に整えると、根元は丸く膨らんだ形になる。それを地元では「男作り」と呼んでいる（写真4）。

興味深いのは、千鹿頭の2神社の有り様である。林では根掘りをするのに対し、神田では諏訪、小野と同様に「水平伐採」をする。隣接する神社の伐採方法が全く異なっているのである。

沙田神社は言わばその中間で、わずかに根元の土を除け地面すれすれのところで水平に伐採する。そのため、伐り口はラッパ型に広がっている。これを「ラッパ型伐採」と称する。この形態で曳行し、お宮に到着した後、建て御柱の前の冠落しと同時に根落し（根本を切り落す）をして「水平伐採」の形状に整えてから御柱を建てるのも独特である。

ところで、根掘りをする神社の木作りについて、詳細をみると、曳き綱の取り付け方（ねじそ、トチ、大トチを用いる）や、御柱に人が乗る足場作りの有無、木にまつわる行事をとりしきる「ゆき（斧）頭」<sup>8</sup>の存在の大きさ等に共通性がみられることが指摘できる。これを図に表わすと図2のようになる。

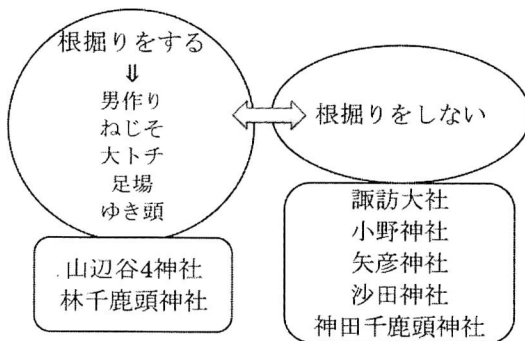


図2 木作りの類型とその境界

こうしてみると、木作りから見た場合、千鹿頭神社の2社の間の尾根に境界があることがわかる。林千鹿頭神社の氏子が住む林・<sup>おおつき</sup>大嵩崎地区は薄川の左岸にあたり、須々岐水神社の氏子地域と隣接する。山辺谷の神社および林千鹿頭神社という根掘りをする神社は、薄川流域に位置する神社として一つの

まとまりを成している。木作りを視点として、「山辺谷」という地域性と矛盾することはない。

そうした地域性が、他の面から見た時にも確認できるのか、次節では木遣りに視点を移して考察する。

### 3. 木作りと木遣りの型の関係

前節では、木作りから見た地域性について考えたが、本節では各神社の木遣りのあり方について詳しく検討してみたい。木遣りは、祭の開始から終了まで途切れることなく聞こえ、祭の進行にも深く関与していると考えられるからである。

木遣り（木遣り唄）とは、

元来、山から大木を伐り出し、大勢でそれを運搬する時に歌われる労作唄であるが、運搬する木が御神木や建築用材となる関係でめでたい唄とされ、のちに石を曳く場合、祭礼の山車（だし）を曳く場合、地つき・石つき・舟おろし、その他の綱を引く作業にも歌われ、転じて三味線伴奏の座敷木遣として室内で祝宴の際にも歌われるようになった。

と説明される<sup>9</sup>。

木遣りは基本的には(1) 始めの掛け声(2) 詞章(3) 囃子詞<sup>はやしことば</sup>の3部構成である。途中に合の手が入る場合もある。

諏訪大社上社・下社では、「オンベ」を持ち<sup>10</sup>、甲高い声で「ここは木落しお願いだ」など、曳行の場面に応じた短い詞章で氏子の力を引き出す。例えば、次のような形である。

(1) (掛け声) ヤー (2) (詞章) 力を合せてお願いだ (3) (囃子詞) ヨイサーヨイサーヨイサー

同じ諏訪大社でも、上社と下社では節回しや囃子詞に違いがみられる。下社には、棚木場<sup>たなこば</sup>(山出し前の御柱置き場)と注連掛け(山出し終了から里曳きまでの置き場)での曳行開始前、曳行終了後などの要所で、詞章が多少長い木遣りもある(4.1で述べる)。木遣りを発声することは、しばしば「なく(鳴く)」と表現される<sup>11</sup>。筆者が聞いたものでは、曳行中に御柱が止まってしまった時に、木遣りを促す場面で「鳴け、鳴け!」という声が掛けられ、「鳴いていいIssか」と応じるやりとりがあった(2016/5/14 下社里曳き 春宮到着前)。

このような木遣りを本稿では「諏訪型」と呼ぶことにする。

諏訪の木遣りは、その発声の特殊性もあり、「木遣り師」と呼ばれる人が担当する。現在では各地域で木遣り保存会が作られ、普段から研鑽をつみ、コンクールも行なわれている。子どもによる木遣りもある。掛け声、囃子詞、所作等については次の通りである。

#### 【掛け声、囃子詞】

ヤー (詞章) ヨイサー、ヨイサー、ヨイサー (上社)

ヤーレー (詞章) ヤレヨーイサ、エーヨイテコシヨ (下社)

エー (詞章) コーレワサーノーエー、ヨイサー (下社)

#### 【祭具、所作】

右手にオンベを持ち、右手または両手を高く上げて直立不動で発声する。

小野・矢彦神社では、諏訪に似た短い木遣りに加え、長い詞章をうたい上げる木遣りがある。短い木遣りは「サクリ」と呼ばれ、諏訪と詞章、用途はほぼ同じだが、節回しが異なる。長い詞章の木遣りの内容は御神徳由緒や神社境内を褒め称える唄など、多岐にわたる。サクリは「なく(鳴く)」といい、木遣り



写真 5 小野神社一の柱 山出し曳き出し

は「うたう（歌う）」という。古くから伝わる伝統的な詞章とともに、新しく作られる詞章もある。このようにサクリと長い詞章の木遣りを併せ持つ形態を「小野型」とする。

【掛け声、合いの手、囃子詞】 ＊ 〈 〉 内は周囲からの合いの手、囃子詞

○サクリ ハー （詞章） ヨイデーコシヨ、ヨイデーコシヨ 〈ヨイシヨ〉

○木遣り 〈ホイ〉 （詞章） エンヤーノセー

【祭具、所作】

右手にオンベを持ち、両手または片手を高く上げてうたう。サクリのときは、両手をゆったりと前に押し出すように動かす。

木遣りを担うのは、木遣り保存会、若者、子どもである。

沙田神社、神田・林千鹿頭神社、山辺谷の神社には、諏訪の木遣りや小野の「サクリ」にあたる短詞形のものは無い。御柱の曳行にしたがい、祭が進行する時と場所に応じて、趣向を凝らした詞章で披露される木遣りは「木遣り唄」の意識が強い。氏子に確かめると、「うたう」イ



メージなのだが、「うたう」とは言わず「やる」と表現するとのことである。木遣りを促す時は「木遣り、やれや」、「木遣り、やってくんねかい（やってくれないか）」などと言う。

詞章は7音・5音を1小節として複数小節を連ね、物語のようにうた語りする。長々と連ねることもできるが、現在では10小節、時

写真 6 須々岐水神社二の柱 曳行中の木遣り

間にして2分くらいに収めるのが、聞く方も飽

きず適当だとされている<sup>12</sup>。伝統的な詞章は勿論、地域の情勢や時事を含んだ新しい詞章であることも多い。こうした新しい詞章は、しばしば即興であるとされる。文字通りの即興であることもあるが、木遣りをやる人によれば、実際には木遣りをやる時と場を勘案し、予め入念に作詞するとのことである。すなわち、その年の祭のために十全に準備された「うた語り」なのである。このような、うた語り型の木遣りを「山辺型」と呼ぶこととする。

「山辺型」は、諏訪、小野とは、持ち物の祭具と所作も大きく異なる。オンベではなく、細く切った色紙を球状に束ね、細い竹の棒の先に取り付けた「采配」を用いる。これを右手に持って振り回し、独特の振付けをとまって木遣りをやる。

担い手は、地域により、専門の木遣り師による所、氏子の中で上手な人がやる所、氏子なら誰でもできる地域など、事情に応じ様々である<sup>13</sup>。

【掛け声、合いの手、囃子詞】

キヤレー皆さまごめんなよ〈ソーイ、ソイ〉　ハーエ（詞章）〈オイスアー、オイスアー〉

詞章が長く連なることから、最後の小節の前には、「ハイ」と一際大きな声をあげる。それが、これで最後という合図になる。末尾の、周囲からの囃子詞は無い所もある。

#### 【祭具、所作】

右手に采配を持ち1小節につき采配を内側に2回半ゆっくりと回しながら足を1歩踏み出し、続いて外側に2度回しながら1歩戻る（2回半回して、2回戻す）という振り付けに合わせて木遣りをやる。周囲の氏子や観衆を意識し、木遣りが皆に聞こえるように身体の向きを変えながら披露しているように見える。

沙田神社は、詞章、所作ともに山辺谷の木遣りと近似する。しかし、掛け声、節回し、囃子詞に独自の調子がある。木遣りは「やる」と言う。

#### 【掛け声、合いの手、囃子詞】

サアーヤルゾー（ハイ）　（詞章）　エンヤラサー〈サーノーエンヤラサー　ソーイ〉

#### 【祭具、所作】

右手に采配を持ち、詞章に合わせて振り回す。この時、山辺と同様に足を動かし体の向きを変える。

沙田神社で独特なのは、御柱曳行の途中で、寄付をしてくれた人にお礼として個別に木遣りをやる習慣である。また、木遣りのほかに建て御柱の際の土搗き唄もある。

以上、各神社の木遣りの特徴を図に表わしてみたのが図3である。諏訪型と小野型は、持ち物（オンベ）や所作、短い詞章の有無において重なる部分があるが、小野型では長い詞章をうたいあげる木遣りをもつという大きな違いをみせる。長い詞章をもつ特徴は山辺型との共通点である。

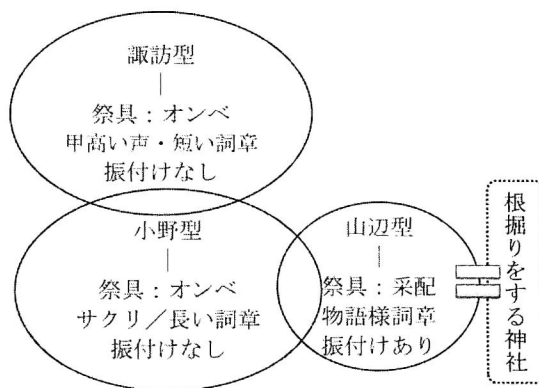


図3 木遣りの地域性

山辺型の特色は采配を持ち、それを回す身体的な所作を伴いつつ長い詞章を連ね、物語を語るようにうた語りすることであるが、その分布は神田千鹿頭神社を除いて、木作りの際根掘りをする神社と奇しくも、重なってくる（図4）。木作りという、祭の根幹となる様式の面からも、祭を支える人が生み出す木遣りの型の面からも、山辺谷というのは御柱祭において、一つの大

きな特色を持つ地域  
であると注視してよ  
いだろう。

次節では、山辺谷  
の木遣りの特徴を、  
その詞章を分析する  
ことを通してさらに  
探ってみたい。

#### 4. 山辺谷の木遣 りの詞章分析

木遣りが、そもそも  
も行事の初めや節目での掛け声であり、氏子たちの気持を鼓舞し、祭を円滑に進行させる働き  
をもっていることは先述した。

そこで改めて山辺谷の木遣りをみると、御柱の曳行を盛り立てる本来的な意味だけでなく、  
祭の進行に伴う様々な場面での唄も包括されていることがうかがえる。本節では、山辺型の木  
遣りの、祭の場面に応じた多様な内容について分析してみたい<sup>14</sup>。

殊に、山出し、里曳きの曳き出しと曳き終りを告げる「綱渡り」「綱返し」と呼ばれる特別  
な唄え詞については、それ以外の木遣りと分けて考えることにする。

##### 4.1. 「やまと」と「綱渡り」、「綱返し」

山辺谷の御柱祭では、山出し（中出し）<sup>15</sup>、里曳きの曳き出しにあたって神事を執り行う。  
この神事は宮司が行なうところとゆき頭が行なうところがある<sup>16</sup>。これに続き、ゆき頭による  
「やまと」が行われる。その名の由来は不明である。この「やまと」も神事という意識で執り  
行われているようである。ゆき頭を先頭に、木元（御柱の提供者）、木遣り師、御柱総代、青年  
年長など主だった役の者が御柱に乗り、采配を頭上で円を描くように回しながら声をそろえて  
ことば詞を唱える。このときの唄え詞を「綱渡り」という。曳き出しにあたり儀式性を強く示すも  
のであると解釈される。他の木遣りとは節回しも所作も全く異なるため、これを木遣りの範疇  
と捉えるか否か、慎重に審究すべき問題を残しているが、現段階では特殊な木遣りの一つと位  
置づけておきたい。

須々岐水神社の例をあげると、

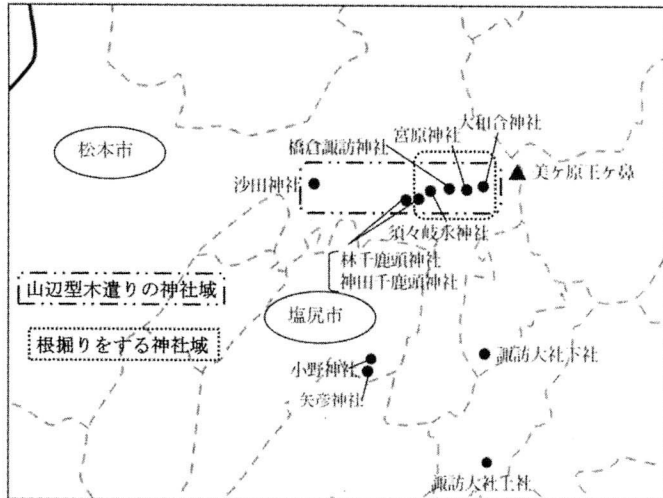


図 4 根掘りをする神社域と山辺型木遣りの神社域の重なり



やっと やまとの綱渡り よい声でわっさと もうひと声のおやといだ お願いだー  
(一の柱)

やっと やまとの綱渡り よいお声だよ わっさと いまひと声のおやとえだー  
(二の柱)

と唱える。「おやとい(え)」は、「祭のお雇い」の意とも「親と子で心を合わせ頑張って引っ張ってください」の意ともされる<sup>17</sup>。橋倉諏訪神社では

やまと やまとの綱渡り お手を揃えてお願いだ やまとは三声で掛け声だ ヨイサー  
ヨイサー ヨイサー

と詞章は変わるが、やはりゆき頭が先頭に立って執り行われる。まさに、これから綱を曳くことを宣言し祭の始まりを印象付ける、神事の性質を帯びた詞章であるといつてよいだろう。しかし、何故そのような詞章になったのか、どのような意味か、不明な点も多い。御柱祭が基本的に口伝えに受け継がれてきた時の長さを感じさせる。

これに対し、曳き終りの際には「綱返し」を行う。これは曳行終了を告げる神事である。詞章は「綱渡り」の語を「綱返し」に変える。須々岐神社一の柱では、采配を逆さに持ち、向きも後方、すなわち曳いてきた方向を向いて唱え、曳き綱を外す。



写真 7 須々岐水神社一の柱 中出し 綱渡り



写真 8 須々岐水神社一の柱 中出し 綱返し

諏訪にも曳行開始を示す「綱渡り」の木遣りは存在する。とくに下社には、柵木場（山出し前の御柱置き場）と注連掛け（山出し終了から里曳きまでの置き場）の出発時、神社到着時などの要所で詞章が多少長い木遣りもあることは3.で触れた。上社の「綱渡り」は、

ヤー めでたく清く御綱渡り（上社山出し 綱置場・綱渡り）<sup>18</sup>

といった短いである。下社の場合は、

ヤーレーー 元から末まで綱渡り

ヤーレーー 伊勢神明 天照皇大神宮 八幡大菩薩 春日大明神 山の神が先立ちて 花の都へ 曳きつけるヨーイサ ヤレヨーイサ エーヨイデコショ

(下社里曳き 注連掛け・綱渡り 2017/5/14)

など、やや長い詞章がある。ところがこれに対応する「綱返し」という木遣りはみられない。これに対応するものは、「山の神返し」ではないかと考えられる。上社では建て御柱の際、次のような詞章で、御柱を先導してきた神を山に返すという内容を示す。

山の神様 お帰りだ (上社 建て御柱・山の神返し) <sup>19</sup>

下社では、次のような詞章となる。

ヤアーレー 恋にこがれし 花の都へ 曳きつけ 山の神これまで ご苦労だ 元の社へ  
返社なせヨーイサ 返社なせヨーイサ ヤレヨーイサ エーヨイデコショ

(下社 秋宮・山の神返し) <sup>20</sup>

上社では「綱渡り」も「山の神返し」も、発生と所作は普通の木遣りと同様なので、この木遣りが特別なものの認識を持ちにくいのではないか。これに対し、下社では木遣りの始まりの「ヤアーレー」の発声の仕方(低い声から次第に高い声へと引き上げる)や節回しが、普通の木遣りとは異なっており、この場の特別性を印象付ける。しかし、山辺谷の「やまと」と比べると、儀式的な意味あいはいは少ないと考える。

#### 4.2 伝承された詞章の木遣り

木遣りが労作唄から始まるという由縁は、「ここは〇〇お願いだ」「力を合わせてお願いだ」などの短い詞章で、ここぞという時に曳き手の力を引き出す諏訪の木遣りによく表れている。それに対し山辺型の木遣りでは、祭の進行に合わせ、祭の中で神の由来や祭の意義を確認するもの、曳行の際困難な場所で曳き子を和ませて疲れを癒したり励ましたりして進行を促進する役割を負うものがあることに気づく。

山辺型の木遣りは長い詞章を通じて、どのような場面で何を語ろうとしているのだろうか。祭の日に記録した詞章をみると、伝承的な木遣りと、時事を含めた創作的な木遣りとに大別することができる。その実際を、須々岐水神社の木遣りを中心にみてみたい。

本節では、伝承された詞章について述べる。

須々岐水神社では、神の由来や祭の意義を確認する、次のような木遣りがある。

○キヤレー一同の若い衆<sup>21</sup>

きと いり  
里より入へ三里ほど

みょうじんだいら  
明神平を下られて

すすきみや  
ここに鎮座の須々岐宮

薄は<sup>かたは</sup>片葉に変われども

身振り変わらぬ<sup>みはしら</sup>御柱を

建てる願いは叶うなら

百も生きましょ若い衆

元気いっぱい頼みます (一の柱 里曳き 鳥居前 木遣り師 2017/5/5)

これは、薄川の上流、現在須々岐水神社の奥社が置かれている明神平（入<sup>いり</sup>山辺）から、薄宮大明神が薄の舟に乗って川を流れ下り、現在の地（里<sup>さと</sup>山辺）に流れ着き祀られたという、神社の由緒を語る木遣りである<sup>22</sup>。その時、神が乗ってきた薄は片側の葉が取れて「片葉」になったと伝えられる。「片葉の薄」は現在でも境内に植えられている。氏子やそれを見守る人々は、曳行してきた御柱が鳥居に入る前に木遣りによって神社の由緒を確認するのである。

○キヤレー皆さまごめんなよ

昔々のその昔

はるばる来たりし<sup>こうらいびと</sup>高麗人

奈良の都を国作り

信濃に来たりしその人は

その名も高き<sup>すすきみや</sup>須々岐宮

ひらいた山辺は今盛り

神のめぐみもあらたかに

氏子繁盛お願いだ (一の柱 曳行中 木遣り師 2017/5/5)

奈良の都から遥々信濃にやってきた渡来人が「須々岐」姓を賜り、須々岐の神を祀り山辺の地を開拓したという伝説が地元にはある。付近には、高句麗式の積石塚古墳である針塚古墳も発掘・復元されている。木遣りは、神の由来のみならずそれを祀る氏子の伝承も語るのである。

御柱祭当日、祭の進行に従って木遣りの内容も変化する。里曳きの例を示す。

○キヤレー皆さまごめんなよ

今日は日もよし天気よし

七年一度の御柱は

御殿山にて生を受け

〇〇（＝木元の姓）様なる杉子さん

町会一同が参加して

握る曳き綱思い込め  
須々岐宮へと送ります  
皆の力を一つにし  
協力あつての二の柱  
無事に嫁入り終えるまで

皆さまよろしくお願いだ (二の柱 里曳き 曳き出し 上金井年長 2017/5/5)

これは、里曳きの曳き出しにあたつての年長による木遣りである。年長とは、実質的に祭を担う青年のまとめ役である。天候の挨拶に始まり、その日に奉納する御柱が何処(誰)の山の、何の木(杉)であるかを紹介、それを送り出すことを宣言し、斎行の無事を祈る。木の由来を語り、木元へのお礼の意を込める儀礼的な内容であるといえる。興味深いのは、御柱となる杉の木を擬人化し、生まれ育った山から須々岐水神社へ嫁入りする(婚礼)と捉えていることである。沙田神社を含めた松本地方の御柱祭では、この認識にあわせるように、木の授受にあたり木元と御柱総代の間で「結納」も行われる。

この後、いよいよ曳行となる。途中、木元の家の前を通過する時には、御柱を止めて御礼の木遣りをやる。また、ある集落を通過して他の集落へ入って行く際は、その集落への挨拶や土地讃めの木遣りもある。

宮原神社の里曳きで、駒越<sup>こまごえ</sup>という集落で休憩し、千手<sup>せんず</sup>集落へ入る際には

(以前聞き取れず)御柱駒越<sup>みはしら</sup>で  
一杯もらつてお輿入れ  
皆さまお世話になりました  
これより嫁いで参ります  
今後駒越のご繁栄と  
ますますのご繁盛

どうか皆さまお願いだエー (宮原神社一の御柱 里曳き 木遣り師 2017/4/16)

といった具合である。道祖神の前で行う例も見受けられ、通行人が境界を往来する際に神に祈った習俗も想起させる。

曳行が進み、神社到着時には、氏子の苦労をねぎらうような木遣りもみられる。

○キヤレー皆さまごめんなよ

今日はめでたい里曳きで

無事に御柱引きつけて<sup>みはしら</sup>

今はうれしい共<sup>とも</sup>笑い  
中でも青年皆の衆  
心意気など申すなら  
連名尽くして読みます  
新井の町会見てみれば  
若葉の萌えたつ若草連  
湯の原町会見てみれば  
湯煙沸き立つ白糸<sup>しらいと</sup>連  
藤井の町会見てみれば  
朝日に勢い朝日連  
上金井町会見てみれば  
四<sup>しか</sup>箇を丸くとやまとめ上げ

圖 上<sup>えんじょう</sup>連とや申します（二の柱 里曳き 神社到着 上金井年長 2011/5/5）

これは、二の柱を共同で担当する4町会の連の名を紹介しつつ、無事に神社までたどり着いたことのめでたさと喜びを述べたものである。これには、趣向を変え土地自慢を織り込み名所尽くしでまとめた、次のようなバリエーションもある。

○キヤレー皆さまごめんなよ

本日まことにご苦労さま  
お神酒もたくさんいただいて  
口はうまくもござらぬが  
山辺の木遣りを聞いとくれ  
旨い葡萄は上金井（上金井は山辺葡萄の産地）  
蝶々を見るなら藤井谷（藤井の山の谷には蝶が多く生息）  
お湯に浸かるなら湯の原で（『日本書紀』にある束間の湯ともされる美ヶ原温泉を抱える）  
粋な男を見るならば

それは新井の若い衆（二の柱 里曳き 神社到着 新井青年 2017/5/5）

これは、4町会の特色といえるものを順に挙げた土地自慢である。短い言葉の中に各町会の特色を面白くまとめている。この後に続く建て御柱に向け、長い曳行の道のりで疲れかけた心身をほぐすような計らいと言えよう。

一方、沙田神社では曳行中、山辺谷では見かけない木遣りを聞くことができる。それは、沿

道の家や商店、会社などからご祝儀が出たときの返礼としての木遣りである。家族や店員が、玄関先や店先に集まり畏まって木遣りを聞いている姿には、ほのぼのとした雰囲気がある。一般の木遣りが、広く祭に参加している氏子衆や、周囲で見守る観衆に向けてのものであるに対し、祝儀の提供者個々に向けられた木遣りなのである。これにより、複数いる木遣り師もほとんど休みなしの状態である。

○サアーヤルゾー

今日はめでたいお祝いで

〇〇様より祝儀出た

こんなまあ嬉しいことはない

〇〇様のまあお家には

七福神が舞い降りて

お家の繁栄は間違いなしだぞエンヤラサー

サーノーエンヤラサー



写真 9 沙田神社四の柱 里曳き 寄付のお礼木遣り

(沙田神社四の柱 里曳き 曳行中 2017/9/24)

次は、長い曳行を終え御柱が境内に入り、建て御柱を前にした場面での木遣りである。これまでの長い準備と氏子の苦労を讃え、残された最大の行事に臨む意気込みが表わされている。

○イヤレー皆さまごめんなよ

今日はめでたき里曳きで

歓喜沸き立つ皆の衆

うたう唄は透き通り

山辺の里へと響きます

見立て、綱縊り、山出しと

氏子の皆さまご苦労さま

無事に建て前終えるまで<sup>23</sup>

皆さま協力お願いだ (二の柱 建て御柱直前 上金井年長 2017/5/5)

このようにみえてくると、松本地方の木遣りは掛け声、合図のみならず、神社や祭祀の意味を物語り、御柱祭の進行状況を見極め、その進行を促す機能を持つ。同時に、氏子の心を和ませる効果や、危険への注意を促して祭の完遂へと向かわせる役割もあると考えられる。こうした詞章は、今では作者の名は不詳となったが、依然脈々と伝承されている。

一方でその年の祭のために新しく作られた詞章もある。次節では、創造的な詞章の木遣りについて考えてみたい。

#### 4.3. 創造的な詞章の木遣り

松本地方では前述した伝承的な詞章の木遣りの他に、その年の状況を捉え、祭の進行と場に呼応した、新しく当意即妙な木遣りもみられる。

その年ならではの木遣りとして、まずは前回平成 23（2011）年の例をあげておきたい。この年は、3月 11 日に東日本大震災が起きた年であった。里曳きに向け着々と準備を進めていたが、国を揺るがす大災害に接し、普段通りに祭を行うか否か議論になったそうである。こうした経緯を受け、里曳き当日の曳行開始前には、震災の事実を織り込み自然の猛威に対する鎮魂を込め、人々の安寧と祭の無事を祈る木遣りも披露された。こうした木遣りのあり方は、御柱祭がその時代と共に生きていることを示すものといえよう。

○イヤレー皆さまごめんなよ

卯年<sup>みはしら</sup>御柱はじまりて

弥生とどろく天変地異

<sup>やまと</sup>  
大和揺らした大津波

この世は移ろい常ならず

諸行無常の響きあり

それでも変わらぬものがある

祭を愛するこの心

無事に御柱建つまでは

<sup>し 力</sup>  
四箇の氏子は威勢よく

山辺の里から元気よく

皆さまよろしくお願いだ （二の柱 曳き出し 湯の原 年長 2011/5/5）

当年の世相を取り込んだ木遣りも、しばしば聞かれるものである。世相とは、言わば氏子や観衆の共通知識である。次の政治問題を取りあげた木遣りには、周囲から「おお、詳しいな」などと声が掛けられ、場は盛りあがりを見せた。

○イヤレー皆さまごめんなよ

きょうはめでたい<sup>みはしら</sup>御柱で

新井のお堂のその前で

ちよいと世の中眺むれば

今の世界を憂います

イギリスEU脱退し

韓国パククネ弾劾し

アメリカトランプ塙を建て

朝鮮みはしら発射して（「みはしら」は「ミサイル」かー注・筆者）

安倍さん森友村度どうなった

それで願いはただ一つ

世界平和を祈ります （二の柱 里曳き 新井権現様お堂前 藤井壮年 2017/5/5）

次は同じく世相でも、御柱祭と大相撲の話題を結びつけた木遣りである。

○ヤーレー皆さまごめんなよ

山辺の里にも春が来て

氏子の皆さま協力し

予定の場所へと着くならば

<sup>みたけうみ</sup>  
御嶽海ではないけれど

小結きたならあと少し

綱を取るまでお願いだ （一の柱 中出し 曳行中 兎川寺壮年 2017/3/19）

当時注目を集めていた郷土出身の人気力士を持ち出して、相撲の横綱と御柱の曳き綱の意をかけた。時事に洒落を加えた巧妙な詞章は喝采を浴びた。

この他に、時事ではないが観衆とともに楽しむような内容の木遣りを、2 例ほどあげておきたい。

○キヤレー皆さまごめんなよ

今日はめでたい中出しで

私や素人のことゆえに

上手い文句はないけれど

じゃまじゃま尽くしで申すなら

月にむら雲邪魔になる

花に嵐は邪魔になる

今夜は子どもが邪魔になるよ （一の柱 中出し置き場到着 青年 2017/3/19）

「<sup>べ</sup>尽くし」といわれる型を取り入れ色ごとを交えた、ことば遊びの要素のある木遣りである。

さらに「尽くし」の詞章を連ね、周囲を楽しませたのが次の例である。

○キヤレー皆さまごめんなよ



今日のはめでたい御柱で  
カエルを集めて申すなら  
トノサマガエルにウシガエル  
紫陽花寄り添うアマガエル  
一茶が後押すヤセガエル（俳人一茶の俳句にちなんで）  
旅に出たならブジカエル（無事帰る）  
嫁は実家にスグカエル（すぐ帰る）  
娘は夜遊びアサガエル（朝帰る）  
湯上り一杯ヨミガエル（蘇る）  
女房は化粧でワカガエル（若返る）  
粋な女にやフリカエル（振り返る）  
私や浮気がばれまして  
帰るに帰れずショゲカエル（しょげ返る）

（二の柱 里曳き 神社到着 上金井青年 2017/5/5）

上記2例は、いずれも御柱が神社に到着し、曳き手の氏子衆も一安心している時の木遣りである。続いて昼休憩となり、町会毎に境内で弁当を食べる際にも多くの木遣りが聞こえてくる。言語遊戯の要素があると同時に、歌い手と聴衆がともに楽しめる内容を持つ木遣りが多い。あちらこちらで、笑いや拍手も起こっていた。慰労と歓楽の要素を持ち併せ、木遣りの表現世界の広がり示すものである。

このように山辺型の木遣りには、伝統的な詞章とは形質を異にし、創造性の高い詞章が存在する。個人の作詞による自由性を内包していることも、その特性であるといえよう。今後、猶多くの木遣りの詞章分析を行ない、その多面的な様態を解き明かしていきたい。

## 5. おわりに

松本地方の御柱祭を巡り歩き、木遣りのあり方に注目することによって、松本地方の御柱祭が木作りのみならず、木遣りにおいても諏訪とは異なる地域性を保持していることを明確に把握することができた。元々力仕事の掛け声から始まったとされる木遣りは、松本地方では祭の時と場に呼応した、当意即妙な言語行動を包含していると考えられる。地域相互の影響関係などは不明であるが、木遣りの詞章の分析を進めることで、各地の木遣りの多様性と意義が把握されるであろう。

こうした木遣りの詞章や所作は、現在も主に口承・見習いで受け継がれている。近年では、

地域や町会毎に保存会が作られ、保存に力が入れられるようになってきた。しかし、個人や個々の会毎の記録はあっても、まとまった記録はほとんど無い状況である。

今回の御柱祭だけでも木遣りは数知れず、筆者が記録できたものだけでも膨大な数にのぼる。より多くの例を吟味し、全体を俯瞰した分類を示せるようにするのが、今後の課題である。

併せて、南信や東北信の御柱祭との比較や、国語学や地理学など、関連する領域と学際的な検討も必要になると思われる。残された課題は多いが、まずは一つ一つの木遣りの詞章を丁寧に掘り下げる作業を進めたいと考えている。

## 付記

平成 29 年斎行の御柱祭調査につきましては、沙田神社、大和合神社、小野神社、神田千鹿頭神社、須々岐水神社、橋倉諏訪神社、林千鹿頭神社、宮原神社、矢彦神社（五十音順）ならびに御柱祭を担う氏子の皆さま、他関係者の皆さまに、多大なご教示とご協力をいただきました。心より御礼申しあげます。

本稿は、第 98 回長野・言語文化研究会（平成 29 年 12 月 9 日）での口頭発表をもとにしたものです。当日会場にて、また稿を成す過程で、貴重なご意見、ご指導をいただいた皆さまに厚く御礼申しあげます。

＊

なお、口頭発表後、信州大学人文学部の学生による『『木遣り』研究発表会』において、音楽の面からの木遣り分析に接した（2018 年 2 月 10 日）。本論の考察と交差するところもあるように見受けられたが、成稿までの時間に限りがあり、その成果に触れることはできなかった。今後、木遣り研究に新しい視点を開く可能性があるものとして触れておきたい。

## 注

<sup>1</sup> 宮坂清通（1956）によれば、「御柱祭」の呼称について、『ミハシラサイ』と呼び、又は単に『オンバシラ』と呼んで、御柱祭を意味する場合もある」とする（『諏訪の御柱祭』p.6）。諏訪大社の公式ウェブサイトの「御柱祭」のページでは「御柱祭（おんばしら）」の表記がある（<http://suwataisha.or.jp/onbasira.html> 最終アクセス 2018-03-06）。なお、現地では他に「おんばしらさい」、「みはしらまつり」、「みはしら」等の呼称もみられる。

<sup>2</sup> 宮坂光昭（1992）『諏訪大社の御柱と年中行事』（p.254~257）によれば、「神地表示説、タブー地説、御柱神体説、神木説、神霊招請説、四無量・四天王擁護・四神説（仏教、中国思想との交渉）、相撲起源説などが挙げられる。なかでも有力なのは、社殿造営代替説であるが、定説には至っていない。これに比較的新しい説として「外から内へ幸せを持ち込む」説、男根表示説（縄文時代の石棒が木に代わったもの）、陰陽道呪術説などがみられる。」とされる。

<sup>3</sup> 太田真理（2012）「須々岐水神社御柱祭—平成二十三年、二の御柱を中心に—」『長野県民俗の会通信』230 号、（2012）「須々岐水神社の御柱祭」『長野県民俗の会会報』35 号、（2013）

「須々岐水神社御柱祭関係用語集」『長野県民俗の会通信』238号

<sup>4</sup>太田真理(2017)「松本地方の御柱祭にみる地域性―山辺谷の木作りを中心に―」『長野県民俗の会会報』40号

<sup>5</sup>注4による。

<sup>6</sup>三之宮は穂高神社(安曇野市)であるとの説もある。

<sup>7</sup>詳細は、注3、注4の拙著を参照願いたい。

<sup>8</sup>「ゆき頭」とは、各町内会の推薦によって依頼・決定され、各町内からも神社からも独立して、木の伐採から建て御柱まで、祭の斎行の一切を取り仕切る役目を負う者である。ゆきはよき(斧)の松本方言。そーまさ(杣さん)と呼ぶ神社もある。山林の保守や木の取り扱いに詳しい人であることが重要な条件となる。

<sup>9</sup>『国史大辞典』JapanKnowledge, <https://japanknowledge-com.ezp.seisen-u.ac.jp>, (最終アクセス 2018-02-28)

<sup>10</sup>「オンベ」とは、棒の先に、木を薄く、細長く削ったものを束ねて取り付けた、木遣り用の祭具。

<sup>11</sup>「鶏が鳴くように聞こえるので」、或いは「鳥のように高く美しい声で」という意味合いがあると伝わる。但し現在では、「鳴く」という言い方は下社では多く使われるが、諏訪大社の全地区で使われるわけではないとのことである。(筆者インタビュー)

<sup>12</sup>平成29(2017)年須々岐水神社御柱祭(二の柱)にて筆者聞き取り。

<sup>13</sup>諏訪では女性の木遣り師が活躍しているのに対し、この地域では木遣りは女性には未だ開かれていない。しかし平成29年、神田千鹿頭神社で初めて女性の木遣り師が登場し話題になった。

<sup>14</sup>1回の祭で木遣りをやる人数は、神社毎、地域毎にまちまちである。内部的には様々な決まりがあるようである。例をあげると須々木水神社一の御柱では、木遣り師は親郷の薄町が2名、他町会各1名、計6名と決まっていって木遣りの中心となる。その他に、御柱総代、町会役員、青年などに加え、一般の氏子の飛び入りもある。二の柱は、木遣り師はおらず、御柱総代や町会長、青年、氏子の中で木遣りが上手な人など予め定められた人達に加え、飛び入り参加もできる。後述するように、弁当の間も各町会で木遣りがあるため、まさに数えきれない人が木遣りをやるというよい。しかし、所によっては、依頼されたり選抜されたりした木遣り師のみが担うこともある(神田千鹿頭神社など)。

<sup>15</sup>須々岐水神社一の御柱では、山出しの日には木を山から麓まで曳き下ろして木作りまでを行い、翌日木作りの場から神社近くの置き場へと御柱を引き出す。これを「中出し」という。以後、里曳の日まで置き場で安置する。二の御柱でもかつて中出しを行っていたこともあったが、現在は行っていない。

<sup>16</sup>宮原神社、大和合神社、千鹿頭神社では宮司が行なうが、須々岐水神社、橋倉神社ではゆき頭が行なう。

<sup>17</sup>平成23(2011)年、29(2017)年須々岐水神社御柱祭(一の柱、二の柱)にて筆者聞き取り。

<sup>18</sup>エルシーブイ株式会社(1997)『神山に響け』(木遣りCD)による。

<sup>19</sup>注18に同じ。

<sup>20</sup>注18に同じ。

<sup>21</sup>最初の掛け声は、キヤリー、キヤレー、イヤレー、ヤーレーなどと町会や個人によって異なることがある。意味に差異はない。書き取りは耳に聞こえる音を再現するよう心がけた。

<sup>22</sup>上條義守(1944)「由緒概説」『社格昇進願書』上條家所蔵文書所収

<sup>23</sup>「建て前」とは、「建て御柱」のことを屋舎の建築にたとえて言う。

(おおた(ほその)まり・フェリス女学院大学/清泉女子大学非常勤講師)